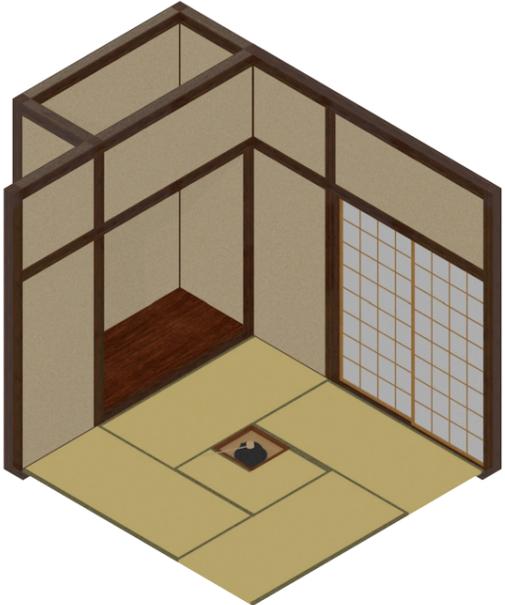
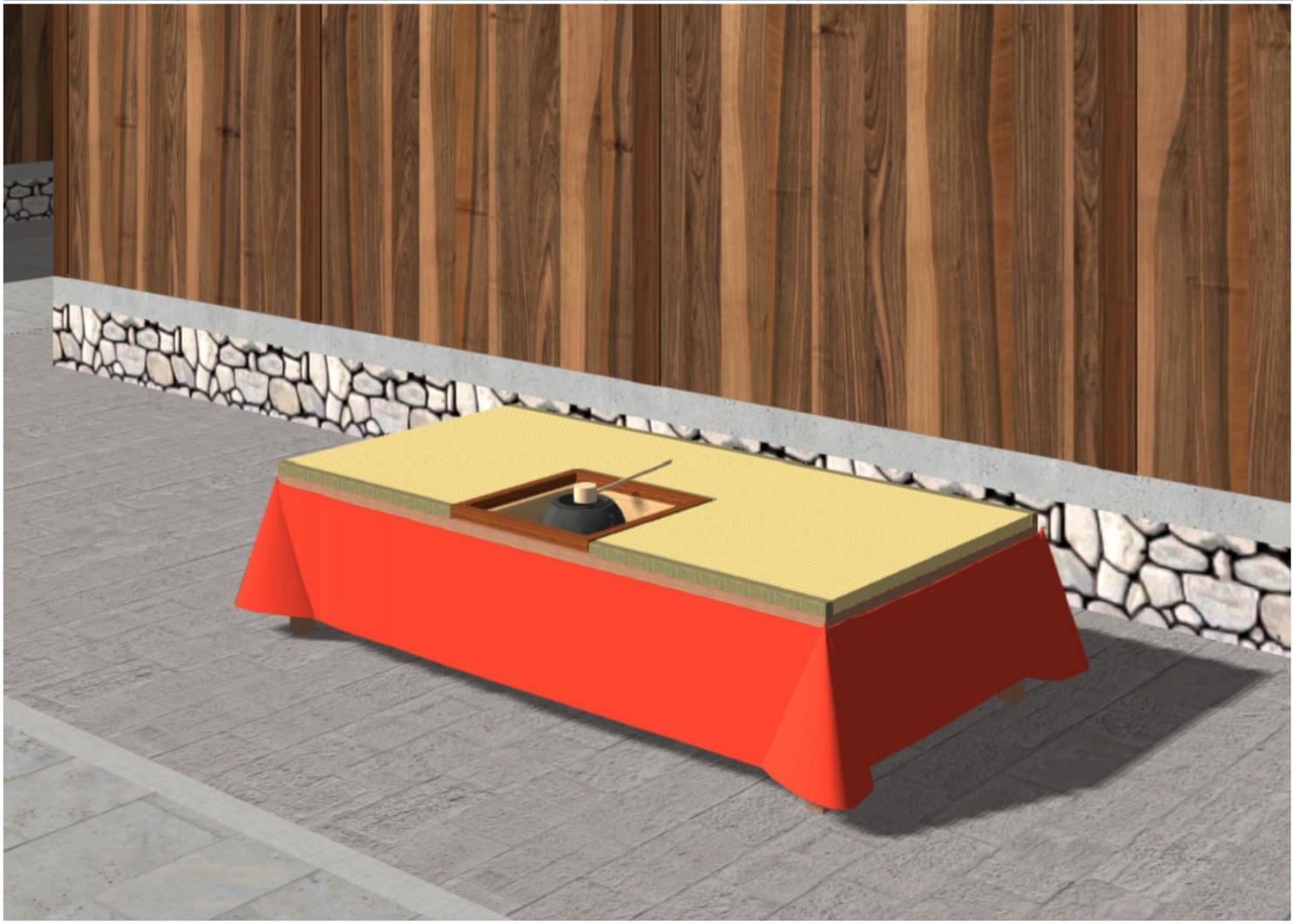


炉の縁台



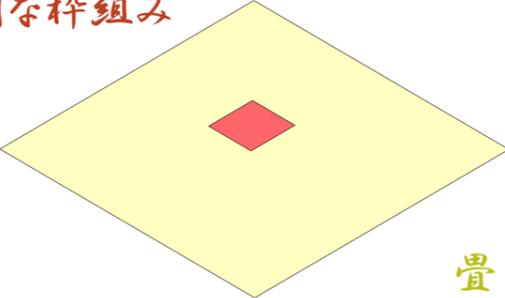
～身近な茶道～

道端にある茶道である。名付ける作法「畳目」を活かした新たな椅子である。京都において、道を歩いている中、茶道を実感できることは少ない。伝統的な茶道を観光客が外で実感し難いことは、残念である。そのため、歩いている最中でも、観光客が茶道を実感できるようなものをデザインする。そのデザインとして椅子を提案する。茶道でみられる「畳目」を活用し、床座ではなく、椅子座としての「畳目」にする。結果、屋外での使用やあらゆる人が使用できるようになる。

名付ける作法「畳目」

茶道で使われる畳空間における作法を名付ける。茶道として使われていた畳空間には、くり貫かれた枠組がある。畳空間において、この枠組は特別な存在であると言える。例えば、この特別な枠組みに置炉を置くことで、茶道という和が確立させる。つまり、この特別な枠組みが畳空間を構成する重要な役割であり、特別な和を生み出す作法である。

特別な枠組み



畳